

## 日本語とトルコ語の 語構成・造語法についての対照研究

Mariko KIZIRAY

### 1. はじめに

本稿は日本語とトルコ語の語構成を比較対照するものである。トルコ語母語話者が日本語学習においてぶつかる困難点のひとつは概して漢字であるが、その延長線上には多様な語彙(漢字語彙を含む)の習得が挙げられる。語彙を効率よく習得し、語彙力を向上させるには、語構成についての知識・理解が有効になると思われる。文法体系においては、共通点を多分にもつ日本語トルコ語間で、語彙体系ではどのような類似あるいは相違が見られるか。また造語法を比較対照することにより、トルコ語母語話者に対する日本語教育、特に効果的な語彙教育を考える足がかりとしていきたい。

### 2. 連想を利用した語構成

人間には類の概念化と命名について、記憶の無駄な負担を避けるような処理能力が備わっているという<sup>1</sup>。トルコ語にはこの特質を生かした、既存の語を組み合わせ、連想・類推力によって行われる命名・造語が実に多い。

#### 2.1. 形・様態からの連想

simit といえばトルコの代表的なスナックでドーナツ型の胡麻つきパンのことである。その形から連想して、海水浴等で使われる浮き輪のことを *can simidi* と呼ぶ。*can* は「命」の意である。同様に、トルコの土産物としても有名なロザリオ(数珠) '*boncuk*' も複合語形成に買って出る。*boncuk fasulye* といえば、中にコロコロとした丸い *boncuk* のような豆が入っている、という売り文句のインゲンマメとなり、*boncuk boncuk terle-mek* といえば、「(玉のような)汗がポタポタと流れる」ということになる。小学生が学校で使うそろばんも、その形から *sayıboncuğu* と言われる。*sayı* は「数」の意である。このように、トルコ語にはごく身近にあるものの形から連想して作り出される語句が多く存在する。空にかかる虹を *gök kuşağı* というが、これは *gök* 「天、空」と *kuşak* 「ベルト」との複合語である。また台所用品で *düdüklü tencere* (笛のついた鍋<sup>2</sup>) とは、「圧力鍋」のことである。トルコの国民的スポーツといえば、サッカーであるが、トルコ語でゴールキーパーのことを *kaleci* という。*kale* 「城」に接尾辞[-ci<sup>3</sup>] (～する人) がついたもので、直訳すれば「城の番人」といった意味となる。これは「ゴール」から「城」を連想した比喻義である。

虫類 *böcek* の名前はその形・様態・発生月からの直観的な名付けが多い。*makaslı böcek* (は

さみをもった虫)とは「クワガタムシ」のこと(日本語の鍬形虫も「鍬」の形からの造語であろう)、sümüklü böcek(粘液、鼻汁虫)とは「ナメクジ」のこと、mayıs böceği(5月虫)、ağustos böceği(8月虫)とは、それぞれ「セミ」「コガネムシ」のこと、ateş böceği(火の虫)とは「ホタル」のこと、「フンコロガシ」はトルコ語でも bok böceği(くそ虫)という。その他、よく出没する場所からの連想で hamam böceği(風呂場の虫)と呼ばれるのは「ゴキブリ」のこと、その鳴き音から cırcır böceği と呼ばれるのは「コオロギ」のことである。cırcır は「ジイルジイル」といった音を表すトルコ語の音象徴語である。

トルコ人にとって一番身近に存在し、またイメージが容易にできる生き物といえば動物であろう。そのため、魚、鳥、虫などの他の生物に名称を付ける際、しばしば動物の名が語の成分として用いられる。まず虫類のカブトムシは gergedan böceği(サイ虫)と言う。deve kuşu(ラクダ鳥)は「ダチョウ」のこと、魚類では、yılan-balığı(へび魚)は「うなぎ」のこと、köpek-balığı<sup>4</sup>(犬魚)は「さめ」のこと、ayı-balığı(クマ魚)は「あざらし」のことである。また形・様態からの連想で、balon-balığı(風船魚)は「ふぐ」のこと、mürekkep-balığı(インク(墨)魚)は「いか」のこと、kılıç balığı(剣魚)は「メカジキ」、kalkan balığı(盾魚)は「ヒラメ」のことである。

## 2.2. 典型的・特徴的な状態・行為からの連想

açlıktan nefesi kokmak(腹が減って、息が臭う)とは「飢えている、貧乏している」こと、‘imdat!’は「助けて!」の意であるが、これから imdat kapısı(kapı は「戸」の意)は「非常口」となる。sınıfta kalma(学年(クラス)に残されること)は「落第」の意、dünyaya gelmek(この世に来る)は「生まれる、誕生する」こと、okur yazar(読める書ける)で「教養のある」の意、ağzı burnu yerinde(口、鼻が適切な場所にある)とは「とてもハンサムか美人」の意、ağzı havada(口が宙に浮いた)は「あきれた」の意、balta girmemiş(斧がまだ入っていない)は「手をつけていない、未開拓の」の意、mavi boncuk dağıtmak(青いボンジュックを配る)は「だれにでもいい顔をする、八方美人である」の意、kırmızı gömlek(赤いシャツ)は「隠しおおせないこと」の意、elde bir(ひとつは手の中に)は「疑いのない、きつと」の意である。dil ağız vermemek(口と舌(ことば)を与えない)は「危篤状態である」の意であるが、トルコでは「死」の訪れを「発語の有無」により直観されるのかもしれない。もっとも慣用表現は時とともに文字通り慣用化し、原義がその使い手にもはっきり認識されないまま使われている場合も多い<sup>5</sup>。

最後にトルコの社会事情、文化的背景を映す表現として次のようなものがある。el açmak(手を開ける)は「ねだる、物乞いする」の意で、トルコの路上で実際よく見られる光景から容易にイメージできる。同様に、el etek öpmek(誰かの手やスカートに接吻する)は「頼み込む、へつらう」の意であるが、これはオスマン帝国時代の名残的表現である。また eli boş(手の中が空っぽの(人))とは「失業中の(人)」を意味する。

## 2.3. レトリックとしての誇張法による連想

これは 2.2.とは異なり、実際には起こり得ないが、誇張して表現することにより、その状態を連想させるものである。英語の eat like a horse、日本語の「晴天の霹靂」などがこれにあたる。トルコ語では、誇張法はよく用いられる手法といえる。baş aşağı gitmek(頭が下へ行く)は「どんどん悪化する」の意、başı kazan(gibi) olmak(頭が大きな鍋のようになる)とは「頭がガンガ

ンする」の意、*karnı burnunda* (お腹が鼻のすぐ近くにある)とは「身重の、臨月の」の意、*başını (taştan) taş vurmak* (頭をあっちこちの石で打つ)とは「後悔する」の意、*dört gözle beklemek* (4つの目で待つ)とは「待ち遠しい」の意、*ağızına taş almış* (口の中に石を入れた)は「押し黙った(人)」の意、*başına çorap örmek* (誰かの頭に靴下を編む<sup>6</sup>)は「たくらむ」の意となる。*ağzı süt kokmak* (口からミルクの匂いがする)は、日本語の「*嘴が黄色い*」と同意である。

人の性格・特徴を表す言葉には、身体部位を語成分とするものが多い。ここでも誇張法がよく使われる。*baş*「頭」を語成分とする語には、*ağırbaşlı* (重い頭をした)で「用心深い、周到な、慎重な」、*baş yukarıda* (頭が上にある)で「高慢な、あつかましい」、*baş yumuşak* (頭がやわらかい)で「すなおな、従順な」の意となる。*göz*「目」を語成分とする複合語には、*açgözlü* (飢えた目をした)で「欲張りの、飽くことをしらない」、*açıkgöz* (開いた目)で「要領のいい、抜け目のない、慎重な、機敏な」、*tokgözlü* (満たされた目をした)で「欲のない」の意となる。*el*「手」を語成分とする複合語 *eli açık* (手が開いている)は「気前のいい」の意となる。

「高慢な」を表す表現には、*burun*「鼻」を語成分として、*burnu büyük* (大きい鼻をした)、*burnu havada* (鼻が宙に浮いている)、*burnu Kaf dağında* (鼻が空想上の非常に高い山 *Kaf dağ* にある)といった表現がある。人の性格・特徴については *açık* という語がキーワードになる場合が多い<sup>7</sup>。またいわゆる暖かい(人柄)に当たる *sıcak* と、それに対する *soğuk* (冷たい) もよく使われる。マイナスイメージでよく用いられる語成分には *boş* (空<sup>から</sup>)がある。例えば、*boşboğaz* (「からののだ」)「口の軽い(人)、おしゃべりな(人)」、*boş adam* (からっぽの人)「役に立たない(人)」などがある。

#### 2.4. 色による識別パターン

世界の言語で最も広範に用いられている基礎的な色彩語彙は「白」と「黒」であると言われる<sup>8</sup>。トルコ語では「白」「黒」の色のコントラストを利用した造語が見られる。身体内部の「内臓」のことを *ciğer* というが、肺と肝臓をそれぞれ「*akciğer*」「*karaciğer*」と呼び分ける。*ak* が「白、白い」、*kara* が「黒、黒い」を意味する。またトルコは三方を海に囲まれているが、北の「黒海」はトルコ語でもそのまま *Karadeniz* (黒い海)、一方、南の地中海は *Akdeniz* (白い海)と称する。尚、白には「清潔な、高貴な」という意が、黒には「暗い、悪い、不幸な」という二次的な意義が付与され、使われる場合がある。例えば *kara haber* (黒い知らせ)「悪い知らせ」、*kara et* (黒い肉)「脂肪が少なく筋の多い肉」、*kara gün* (黒い日)「ついてない日、困っている時」、*ağzı kara* (黒い口)「いやなことを言って楽しむ人」、*karacı* (黒い人)「陰口をきく人、中傷家」などの表現がある。白と黒の対比をよく表すのに次のような表現がある。*Ak akçe, kara gün içindir.* (白いお金は黒い日のため)とは「貯金は困ったときに役立つ」という意の比喩表現である。トルコの現与党は *AK Parti* (*Adalet ve Kalkınma Partisi*)であるが、この *AK* という略称に対して、非支持者層はこれを *A K P* と略称すべきだと非難している。これは取りも直さず「*ak*」から連想されるプラスイメージに異議を唱えるものである。

### 3. 造語の手法

日本語の語のつくりは単純語と合成語に大別される。合成語はさらに、複合語(従属関係・等位関係)、疊語、派生語(接頭辞-/接尾辞)に分類される<sup>9</sup>。疊語が多いのも日本語の特徴の一つであると言われるが、トルコ語にも多く存在する。例えば、*ara sıra* (時々)、*ayrı ayrı* (別々)、*teker teker* (ひとつひとつ)などがある。また同じ語を繰り返すことにより、同類をくだけた形

で示す準量語的の語法もある。これは2番目の語頭を m に置き換え（子音で始まる語の場合は、その子音の代わりに m を入れる）、ekmek mekmek（パンやらなんやら）、para mara（お金やらなんやら）、gazete mazete（新聞やら雑誌やら）といった形で多用される。

本節では派生語と複合語の語構成を中心に、トルコ語に特徴的な造語法を取り上げ、日本語と比較対照していく。

### 3.1. 品詞の「転成」と派生語

語構成の方法のひとつに、品詞の転換を行う「転成」がある。日本語の場合、動詞の連用形から転成する名詞が数多くある。動詞から転成した名詞の中で代表的なものは、①元の動詞の意味を広くそのまま持つ「動作名詞 action noun」と、②(a)「～することを常習的、習慣的にするもの・人・動物」の意から転じて(b)「そういう働きをする器具、機械」を表す「動作主名詞 agent noun」である。①には「研究」「息抜き」「斜め読み」「幅跳び」「日帰り」、②(a)には「山伏」「鳶」、(b)には「足つぎ」「はさみ」「扇」「はさみ」などの例がある。

派生語は、単純語や複合語に接辞が付属的に結合してできるものである。日本語の接尾辞には、[-さ/み/めく/ぼい/らしい/ぶり/そう/げ/性/的]など、概して意義が抽象化されるものが多い<sup>10</sup>。これは和語の接尾辞が多いことにも起因するであろう。トルコ語の接尾辞は品詞を転換させる役割を担っており、多くの具体的事物名が作り出される。

動詞から名詞を作る接尾辞には9種ほどある。その中から6種を取り上げる。(1)(2)の接尾辞は前述の日本語の①②と相似する用法である。②については、名詞になった途端、本来の動詞が持っていた意味よりも狭くなる場合が多いのも同様である。

(1) [-me/-ma]は、動詞語幹から完全に名詞化する。(例) bekle-(待つ)→ bekleme salonu(待合室)。

(2) [-k(-ek,-ak)]は、動詞語幹から、その動作の場所、道具、主体などを示す名詞を作る。

(例) dur-(とまる)⇒durak(停留所)、kapa-(ふさぐ)⇒kapak(ふた)、yat-(寝る)⇒yatak(ベッド)

(3) [-mek/-mak]は、動詞語幹から、その動作の結果・対象・用具などを示す名詞を作る。

(例) çak-(火を打ち出す)⇒ çakmak(ライター)、ye-(たべる)⇒ yemek(食事、料理)

(4) [-t(-it,-ıt,-üt,-ut)]：動詞語幹からその動作を特徴づける物を作る。

(例) geç-(通る)→ geçit(通路)、yak-(燃やす)→ yakıt(燃料)、göm-(埋める)→ gömüt(墓)

(5) [-e,a,i,ı,ü,u)m]は、動詞語幹から、その動作の結果・量・程度などを示す名詞を作る。

(例) doğ-(生まれる)→ doğum(誕生)

(6) [-ev(-av,-v)]：動詞語幹から、その動作の結果、対象を示す名詞を作る。

gör-(見る)→ görev(任務)、öde-(つぐなう)→ ödev(義務、宿題)、sına-(ためす)→ sınav(試験)

その他、gelir (来るもの) → 「収入」、gider (出るもの) → 「支出」などの例もある。

トルコ語では転成が2回にわたり行われ、さらなる関連語が生み出されることも多々ある。

(例)[名]dil「舌、ことば」⇒[動]dile-「願う、望む」⇒[動]dilen-「物乞いする」⇒[名]dilençi「乞食」

[動]biç-「切る」⇒[名]bıçak「ナイフ」⇒[動]bıçakla-「切りつける、けがをさせる」

[動]böl-「分ける、割る」⇒[名]bölüm「分けた部分、章、学科」⇒[動]bölümle-「分類する」

日本語では、動詞から名詞が派生されるのが普通であるが、関係が逆転し、「たそがれ」⇒「たそがれる」、「目論見」⇒「もくろむ」といった動詞が作られることもある。これを「逆成」というが、トルコ語では、むしろ頻繁に見られる派生法である。名詞・形容詞を動詞に変える接尾辞には4種ほどある。以下に適用範囲の広い接尾辞から順に取り上げる。

- (1) [-le/-la] : 名詞 (形容詞) 語幹から、そのものを使った動作、その性質を表現する動作を示す動詞を作る。(例)[身体名詞] diş(歯)→dişle-(かじる)、avuç(手のひら)→avuçla-(つかむ)、omuz(肩)→omuzla-(かつぐ)、sirt(背)→sirtla-(背負う、担ぐ)、[モノ名詞] ateş(火)→ateşle-(火をつける)、su(水)→sula-(水をやる)、fırça(ブラシ、筆)→fırçala-(ブラシをかける、歯を磨く)、[形容詞]temiz(清潔な)→temizle-(きれいにする)、zor(難しい、困難な)→zorla-(無理にさせる、強制する)
- (2) [-lan/-len] : 名詞語幹から、その作用や性質を受ける自動詞を作る。  
(例) hasta(病人)→hastalan-(病気になる)、çiçek(花)→çiçeklen-(花が咲く)、ev(家)→evlen-(結婚する)、kir(よごれ)→kirlen-(よごれる)
- (3) [-laş/-leş] : 形容詞 (名詞) 語幹から、その性質・特徴を獲得することを示す自動詞を作る。  
(例) ağır(重い)→ağırlaş-(重くなる)、katı(かたい)→katılaş-(かたくなる)、uzak(遠い)→uzaklaş-(遠ざかる)、bir(1)→birleş-(ひとつになる)、iyi(よい)→iyileş-(よくなる)、kötü(悪い)→kötüleş-(悪くなる)
- (4) [-se/-sa] : 名詞・形容詞語幹から、その意欲・指向を示す動詞を作る。(例) su(水)→susa-(喉が渇く)、hafif(軽い)→hafifse-(軽視する)、önem(重要性)→önemse-(重視する)

トルコ語では、元の名詞と関係性のある動詞が、語基<sup>11</sup>を同じくする単純語のレベルで応用範囲広く派生する。evlen-mek (結婚させる) が ev「家」という名詞から派生している点も、西洋の個人主義とは異なり、「家」との関係を示唆するトルコの社会・文化的背景が伺え興味深い。

### 3.2. 芋蔓式語彙造語法

トルコ語の基本語は、日本語の和語と同様、意味範囲および使用範囲が広いものが多い。こういった語は芋蔓式に関連語彙を編成する。

- (1) 動詞 geç-mek : 「過ぎる、渡る」が原義である。sınıfı geçmek (学年を過ぎる) とは「進級すること。動詞語幹から、その動作の結果を示す名詞を作る接尾辞[-e(-a)]をつけてできた gece は「夜」、動詞の連体形活用語尾[-(y)en]をつけてできた geçen hafta は「先週」、不定過去を表す動名詞を作る接尾辞[-miş]をつけてできた geçmiş は「過去」の意となる。geçit (dağ geçidi)「峠」から、demiryolu geçidi (鉄道を越えるところ)「踏切り」、yaya geçidi「横断歩道」、üst geçit「歩道橋」、alt geçit「(通りを渡るための) 地下道」などの語が生まれた。動詞 geçmek の二義的な意味「暮らす」から geçim「暮らし向き」が派生。形容詞としての geç (遅い) から名詞 gecikme (遅れ) が派生。  
慣用表現では、kara kedi geçmek (黒猫が通りすぎる) は「冷たい間柄になる」、başından geçmek (頭→身(自身)から過ぎる) は「身に起こる、経験する」の意となる。
- (2) 動詞 bat-mak : 原義は「沈む、暮れる」である。「沈む」と言えば、「日は西に」という発想から転移し、batı は方角の「西」を表す。さらに batı から派生して batılı は「西洋人」、batılılaşma は「西洋化」、baticı は「西洋擁護者(信奉者)」となる。
- (3) 動詞 doğ-mak : 原義「(太陽・日が) 昇る、生まれる、生じる」から、「日の出<sup>いづる</sup>ところ」をかけて、doğu は「東」を表す。また doğ-mak から派生して、doğur-「生む、生産する」、doğuş「生まれ」、doğum günü「誕生日」、doğuştan「先天的」といった語句ができる。  
トルコ語で南の方角は güney である。この語も、「日、一日、太陽」を意味する gün から、日のあたる場所、すなわち「南」なり、という連想のもと生み出されたと思われる。

### 3.3. 音象徴語からの造語

擬音語、擬態語が多いのは日本語の特徴のひとつであり、日本人は物自体の性質、特徴を客観的にとらえるよりも、それらに接するとき感覚に訴えるものを中心にして表現する、と言われる<sup>12</sup>。そこで音象徴語に関係のあるトルコ語と日英の相当語を比較してみたい。

トルコ語		日本語	英語
音象徴語(a)	(a)の派生語		
gürül gürül (ゴーゴー)	gök gürültüsü <sup>13</sup>	雷(ゴーゴー)	thunder
horul horul (グーグー)	horultu	いびき	snore
havhav (ワンワン)	havlamak	(犬が)吠える	to bark
şırl şırl (チョロチョロ、さらさら)	şırıldamak	チョロチョロ (サラサラ) 流れる	to splash gently
fırl fırl (くるくる、ぐるぐる)	fırıldanmak	くるくる (ぐるぐる) 回る	to spin, whirl
pırl pırl (ピカピカ)	pırıldamak	ピカピカする	to shine
kıpır kıpır (そわそわ、せかせか)	kıpırdamak	かすかに動く、ゆれ動く	to stir, move slightly

日本語の語彙には「い形容詞」が少ないと言われるが<sup>14</sup>、それを補うものとして様々な擬態語が用いられる。一方トルコ語では音象徴語に直接接尾辞をつけ、動詞に転成して使われるケースが多い。これは幼児語に限らない。この点からも、トルコ語がより直観的、感覚的な連想・イメージを取り入れた語彙体系になっていることの一端が窺える。

### 3.4. 基本語と基本語の組み合わせによる経済的造語法

トルコ語は非常に豊かな表現形式を持つ言語であるが、語は有機的なつながりを持っており、語の成分から全体の意味を類推できるものが多い。また基本語を活用した経済的合成語が多くみられる。合成語の語成分の組み合わせは、日本語の辞書の説明の如きものも多く、直観的に理解し易いつくりとなっている。例えば、日本語の「振り返る」は『岩波国語辞典第6版』では、「顔を後ろに向けて見る」とある。トルコ語では *arkasına bakmak* (後ろを見る) といった具合である。

トルコ語の語句の並べ方は、従属する要素が先に立ち、従属される要素があとにくるのが大きな法則であり<sup>15</sup>、これは連語や合成語においても当てはまる。日本語の場合も、日本語の統語の原則に従い、従属関係にある複合語では、修飾成分が主要成分に前接する形式をとる<sup>16</sup>。以下、具体例を示す。

<動詞句> *sessiz kalmak* (音・声なしでいる)「だまる」、*suyunu çıkarmak* (水を出す)「しぼる」、*tekrar düşünmek* (繰り返し考える)「反省する」、*üstüne koymak* (上へ置く)「積む」、*yere düşürmek* (地面に落ちる)「倒れる」、*yerden kaldırmak* (地面から持ち上げる)「拾う」、*yerini almak* (所を得る)「代わる」、*yol göstermek* (道を見せる)「案内する、指導する」、*bir dakika bakmak* (一分間見る)「のぞく」、*bütün stoku satılmak* (全部の在庫品が売れる)「売り切れる」、*hastaneden çıkmak* (病院から出る)「退院する」、*hastaneye yatmak* (病院で寝る)「入院する」、*işe girmek* (仕事へ入る)「就職する」、*iş vermek* (仕事を与える)「雇う」、*gidip gelmek* (行って戻ってくる)「往復する」、*hava vermek* (空気を与える)「扇ぐ」など。

<名詞句> *bütün gece uyumama* (一晩中寝ないこと)「夜明かし、徹夜」、*ses kayıt*「音・声の録音」、*yüzyıl* (100年)「世紀」、*cankurtaran* (命を助けるもの)「救護員 *life saver*」、*çevre kirliliği* (周囲の汚染)「公害」、*doğal zenginlikler* (自然の豊かさ)「資源」、*ek iş* (追加の仕事)「アルバイト」、*evde olmama* (家に不在)「留守」、*hasta bakımı* (病人を見ること)「看護」などがある。

<形容詞、副詞語句> az bulunur (少し見つかる)「珍しい」、çok defa (たくさんの回)「しばしば」、son günlerde (最後の日々)「最近」。ağız var dili yok (口あり舌(ことば)なし)「物静かな(人)」など。

その他 [-(h)ane, -evi]は、名詞語幹から、それを扱う場所・建物を示す名詞を作る接尾辞であるが、日本語なら「～屋・店・所・館・局」などと使い分けるところの語を幅広く作ることができる。また日本語なら部屋ごとに「寝室、居間、ダイニング (ルーム)」など「部屋」に相当する語を言い換えるが、トルコ語ではほとんど、～odası で一括できる。機械系については、日本語の漢語の「～機」(洗濯機、食器洗い機など)と同様、「～makinesi」が使われる。

日本語の語種は「和語」「漢語」「外来語」「混種語」の4種に分類できるが、和語から成る複合語に関しては、その造り方が込み入っている場合が多く、直観的に意味を類推し難いものが多い。以下例を挙げると「子どもだまし」「仁王立ち」「蛇行」「うなぎのぼり」「腰湯」「川流れ」「親方雨」「鶯張り」などがある。また「爪楊枝・耳かき」のように用途の類似から、英語では toothpick/earpick と、語要素の一部 pick が共通するものも、日本語では全く別の要素がたつ。「湯飲み・酒飲み」のように語のつくりは同じであるが、意味することが全く異なる場合もある。こういった点から、日本語には「結合契機」の無いことばが以外に多いと言われる<sup>17</sup>。但し、漢語の複合語についてはより分析的であり、トルコ語の語構成につながるものがある。この点については次節で述べる。

#### 4. 外来語の取り入れ方に見る造語方法

##### 4.1. 漢字による造語法

日本語の漢語は、明治期以前に入ってきた古い漢語と、明治期以後 19 世紀後半から 20 世紀初めにかけて、主に西洋の文献を翻訳する際に作り出された新しい漢語<sup>18</sup>に大別できる。外来語への漢字を使った対処法には、(1) それを表すための全く新しい漢字を造る (2) 既にある漢字で当て字にする (3) 意識する、の3通りがある。(1)の手法には限界があり、今ではほとんど見られない<sup>19</sup>。

翻訳語(意識語)は漢字の造語能力の高さを物語る。単に音だけに移すのではなく、意味を暗示させ、イメージを彷彿させることも可能となる。例えば、「倶楽部 club」「型録 catalog」「画廊 gallery」「冗句 joke」などは漢字の特性を生かした翻訳語といえる。また本場中国には「奈落」(「どうして落ちる」の意)、「閻魔」(「閻」には「村里の門」の意があり、地獄の門口で罪人を取り調べる魔王のイメージが描き出される)などの訳語もある<sup>20</sup>。しかし、漢語の中には個々の漢字成分からは意味を類推できないものもある。例えば「簿記」は book-keeping の翻訳語であるが、book の[bo]の音から「簿」、keeping の [ki]の音から「記」としたもので、いわゆる「当て字」による造語である。時代は遡り、漢方医学の用語を翻訳する際に、「胃」にあたる「物食<sup>もの</sup>み袋」という語が作り出された。この語は『和名類聚抄<sup>21</sup>』には採録されたが、後世には根付かなかった例である。こういった苦肉の策による造語はトルコにおける造語手法を想起させる。「物食み袋」と同様、トルコ語の中にも人々の間には根付かず死語となる語も多い。例えば、ağ yatak (網のベッド)は「ハンモック」の翻訳造語であったが結局 hamak が使われ、uçantop (飛ぶボール)は「バレーボール」の意であったが、現在では voleybol が使われている<sup>22</sup>。

#### 4.2. 漢語とトルコ語の語構成の比較

「形・音」に加え、「義」を併せ持つ漢字は、二つ以上の漢字を組み合わせることで、個別的な概念を形成することができる。その結果、漢語は和語に比べれば意味領域が狭くなる。しかし和語と違い、表現レベルではなく、語彙レベルで思考内容を具体化できるという大きな利点がある<sup>23</sup>。これは漢字の結合力によるところが大きい。

和製漢語（熟語）とトルコ語の語構成は類似しているケースが多くみられる。下表の(1)～(5)の日本語とトルコ語は、まったく同じ語要素となっている。(6)(7)は若干受け取り方に相違があるものの、近似した発想からの語構成であろう。いずれのトルコ語も日本語の漢字の翻訳語（意識語）的語構成となっており、個々の語成分の意味が分かれば全体の意味が把握できる。トルコ語は確かに表音文字であるのだが、語単位にまとめられて表語的に使われる合成語が多く、ここに漢語の語構成との類似が見いだされる。

	日本語	トルコ語	英語
(1)	耳鼻咽喉科	Kulak Burun Boğaz uzmanı (KBB)	otorhinology
(2)	産(婦人)科医	doğum uzmanı	obstetrician
(3)	高所恐怖症	yükseklik korkusu	acrophobia
(4)	皮膚病	cilt hastalıkları	dermatitis
(5)	火山	yanardağ (燃える山)	volcano
(6)	お多福かぜ (耳下腺病)	kabakulak (大きい耳)	parotitis (mumps)
(7)	冷蔵庫	buz dolabı (氷の棚)	fridge (refrigerator)

日本語はカタカナという文字を使うことにより、外来語をそのまま取り入れることが可能となる。下表は、外国語移入の際に、日本語ではカタカナ語として原語のまま取り入れ、トルコ語では訳語に移し変えて移入された語例である。漢字しか持たない中国語では、カタカナを使って音を移すという手法は使えないため、基本的にすべて意識することで取り入れる。よって、下表のようなケースも中国語とも対照させれば、借用の際の造語法の相違が浮かび上がってくるのではないと思われる。

日本語	トルコ語	英語
クリーニング	kuru temizleme (dry cleaning)	dry cleaning
スーツ	takım elbise (一組の服)	suit
エスカレーター	yürtyen merdiven (歩く階段)	escalator
ボールペン	tükenmez kalem (なくなるペン)	ballpoint (pen)
ハーブティ	bitki çayı (植物茶)	herb tea

これまでは具体的な物の名前を中心に見てきた。それでは、抽象名詞などの語のつくりはどのようなになっているであろうか。ドイツの哲学者フィヒテ(Johann Gottlieb Fichte)は、単語の要素のすみずみまで、その国民の直観的理解が行き渡っているような言語を「生ける言語」と呼び、「生ける言語」では、国民の「感性的部分」(具体的事物)は、無理なく「超感性的部分」

英語	日本語	トルコ語
philanthropy	博愛	博愛主義者 hayırsever(善、慈善を愛する者)
humanitarianism	人道主義	人道主義者 insanıyetperver <sup>24</sup> (人間を愛する者)
introspection	内省	içgözlem(内の観察)
superstition	迷信	boş inanç (空の信仰)
anthropology	人類学	antropolojik, insanbilim(人類学) <sup>25</sup>



(抽象的事物)と連続すると述べた<sup>26</sup>。英語も語源の知識により類推可能な場合もあるが、各構成要素は自立語としては使われない場合が多い。一方のトルコ語は各要素が自立して使用される語基からなり、語源の知識等なくとも、直観的に語義を認識できる。本稿を通して見てきたように、トルコ語の語彙はフィヒテの言を借りれば「生ける言語」に正に該当するといえるであろう。

## 5. おわりに

日本語の児童文学の大半は和語を中心に綴られている<sup>27</sup>。これは、文字を自ら読むことのできない乳幼児は、語り聞かせてもらうことにより耳から理解し、その際に語られることばとしては和語がもっとも相応しいからにほかならない。目の不自由な人にとっても、和語のほうが分かり易いと言われる。耳からそのまま理解できるという点で、トルコ語は日本語の和語(但し雅語は除く)に似ている<sup>28</sup>。一方、語構成については、漢語(当て字等は除く)的構成となっており、日本語の和語、漢語それぞれと別の観点から共通項をもっているといえる。漢字という表意文字に頼る日本語と違い、トルコ語は音による認識が第一とされる。そのため、たぶんに人間の認知能力を生かした語構成、すなわちイメージ、発想、連想力を生かした語構成となっている。換言すれば、難漢語、外来語などの知識の有無・多少により理解度に差が出てくる語彙体系ではないといえる<sup>29</sup>。これは1923年のトルコ共和国の樹立以後行われた、文字改革、及びいわゆるトルコ語純化運動<sup>30</sup>の成果であろう<sup>31</sup>。

非漢字圏にあるトルコでは漢字は特異な存在であり、学習者が抵抗感を覚える嫌いがある。まずは自らの言語とも重なり合う部分があるという発見、すなわち漢字語彙の語構成のあり方が、トルコ語の語構成と多分に共通点をもつという気づきを与え、漢字にまずは親近感、興味を抱かせるというアプローチが必要なのではなかろうか。また、日本語独自の訓読みの成り立ち、すなわち漢字の一字一字に、それぞれの意味に照応するように当てられた訓読みこそが、漢語の訳語となっていることを理解させることも必要であろう。こうしたアプローチの在り方が、漢字嫌い、ひいては語彙力伸び悩みの打開へとつながっていくのではないかと思われる。

<sup>1</sup> 姫野/他(2005), p25 参照。

<sup>2</sup> 本稿でトルコ語表記の複合語のあとに( )内に示すのは、直訳した場合の意味である。

<sup>3</sup> 名詞語幹から、その名詞にかかわる職業や習性の人を作る接尾辞。

<sup>4</sup> köpek (犬)は俗語として英語の *bastard* の如く「ひどいやつ」といった意味合いで使われることもあり、日本語の「犬」のように愛玩動物的イメージではない場合が多い。これはイスラム教では犬が「不浄のもの」とされていることにも関係あろう。

<sup>5</sup> 例えば baş göz etmek (頭、目になる)とは「結婚させる」の意であるが、試みにトルコ語母語話者の学生にどうしてこのような表現になるのか問うてみたところ、いろいろな解釈がでてきた。①結婚すると、夫が家長として生計を支え、妻が家で子どもを見守るから。②結婚すると、同じ枕に頭を置き、目を見あうから。③人間の体で一番大切な部分は頭と目であり、互いが互いの頭となり目となって生活していくから。

<sup>6</sup> 糸糸で編まれたハンドメイドの靴下は、実際よくトルコの街角で売られており、「靴下を編む」という表現は、人々にとって馴染み深いものである。

<sup>7</sup> açık kalpli / açık yürekli 「率直な、心からの」、açıksözlü 「遠慮なくものを言う(人)」など用例は数多い。

<sup>8</sup> Brent Berlin & Paul Kay (1969), *Basic color terms: their universality and evolution*, Berkeley: University of California Press.

<sup>9</sup> 玉村(1988), p.180.

<sup>10</sup> 姫野他(2005), p.41.

<sup>11</sup> 実質的・語彙的な意味を表し、語の意味の中核的な部分を担う造語成分のこと。玉村(1988), p.174 参照。

<sup>12</sup> 国際交流基金(1981), p.56.

- <sup>13</sup> 直訳すれば「空のうるさい音」である。
- <sup>14</sup> 金田一(1988), p.131 参照。
- <sup>15</sup> 松谷(1990), p.63.
- <sup>16</sup> 玉村(1988), p.179.
- <sup>17</sup> 玉村(1987), p.32.
- <sup>18</sup> 新しい漢語には「自由」「民主主義」「政府」「化学」「哲学」「文学」などがあり、近代化を進めるため、西洋の諸制度、概念を徹底翻訳主義により輸入した。
- <sup>19</sup> 加納(1989), pp.171-175.
- <sup>20</sup> 加納(1989), pp.191-192.
- <sup>21</sup> 934年頃源順によって編纂された日本最初の意味分類体の漢和辞書。10巻本と20巻本とがあり、20巻本では、漢語を32部249門に類聚・掲出し、音・意義を漢文で注し、万葉仮名で和訓を加え、文字の出所を考証・注釈する。承平(931~938)年中、醍醐天皇の皇女勤王内親王の命によって撰進。略して「和名抄」とも言われる。
- <sup>22</sup> 共和国成立以後はじまった「トルコ語純化運動」は現在も続いており、Türk Dil Kurumu(トルコ言語学協会TDK)がトルコ語固有語彙から成る新造語を発表する(松谷[1996], p.32)。しかし当初に比べ、現在は外国語に対する姿勢が緩和してきているという(Türk Dil Kurumu[2005], p.VII-XI)。
- <sup>23</sup> 森田(1991), p.115.
- <sup>24</sup> -pever(ペルシア語からの借用), -severはともに「~好きな」を表す接尾辞である。
- <sup>25</sup> 知識層では外来語のほうをより好んで使用する傾向があるのはトルコでも同様である。ギリシア語起源のanthropo-(人間)から成るフランス語あるいは英語からの借用語 antropolojikのほうが実際はよく使われる。その他の「学名」を表す語も借用語がそのまま使われる場合が多い。
- <sup>26</sup> 『ドイツ国民に告ぐ』(1999 玉川大学出版部、石原達二訳) 原著: Johann Gottlieb Fichte(1807): Reden an die Deutsche Nation 参照。
- <sup>27</sup> 子どもに読み聞かせをしていた時、和語で綴られている文章の中に、突如「最新式」という漢語が出てきたときには、随分奇異に感じられた。
- <sup>28</sup> 日本語の話しことば、書きことばともに、上位類出語は和語が占めるという調査結果がある。文化庁(1972), pp.50-51 参照。
- <sup>29</sup> 日本では明治5年に「学制」が施行され、国民が皆、小学校に入学することになったのは明治6年のこと。漢字・漢語の使用において全国民が平等になったのは明治37年からといわれる。玉村(1988), p.93.参照。
- <sup>30</sup> アラビア文字の廃止とローマ字の採用、アラビア語、ペルシア語などの外来語を追放し、純粋のトルコ語を復活させる、術語のトルコ語化、口語と文語の一体化ないし距離の縮小、新造語等の諸施策が実行された。松谷(1990), pp.28-30 参照。
- <sup>31</sup> 但し、昨今の外来語の氾濫により、原語のままトルコ語に移入されてしまっている語彙(借用語)も多く、老若間、世代間で理解の差が出てきているようである。

## 参考文献

- 加納喜光(1989)『漢字の常識・非常識』(講談社)
- 金田一春彦(1988)『日本語 新版(下)』(岩波書店)
- 国際交流基金(1981)『教師用日本語ハンドブック⑤語彙』(凡人社)
- 玉村文郎(1987)『NAFL Institute 日本語教師養成通信講座 7.日本語の語彙・意味II』(アルク)
- (1988)『講座日本語と日本語教育 6 日本語の語彙・意味(上)』(明治書院)
- 姫野昌子/上野田鶴子/井上史雄(2005)『言語文化研究III 現代日本語の様相』(放送大学教育振興会)
- 文化庁(1972)『国語シリーズ 別冊1 日本語と日本語教育 一語彙編一』(大蔵省印刷局)
- 松谷浩尚(1990)『トルコ言語学概論』(泰流社)
- (1996)『トルコ社会言語学』(泰流社)
- 森田良行(1991)『NAFL 選書 11 語彙とその意味』(アルク)
- Redhouse(2006)“Büyük ELSÖZLÜĞÜ İngilizce – Türkçe, Türkçe – İngilizce”
- Sevan Nişanyan(2007)“Sözlerin Soyağacı Çağdaş Türkçenin Etimolojik Sözlüğü”(ADAM)
- Türk Dil Kurumu(2005)“Türkçe Sözlük”
- 竹内和夫(1989)『トルコ語辞典 Türkçe – Japonca Sözlük』(大学書林)